デイヴィッド・ウィギンズ「感受的主観主義？」

本稿では、デイヴィッド・ウィギンズの「感受的主観主義？」[1]を紹介する。ウィギンズは、オックスフォード大学の名誉教授(Emeritus Wykeham Professor、論理学)である。主な著書としては、Wiggins(1987)の他、*Sameness and Substance*(1986)がある。

この論文は、18 の節に分かれており、第 1 節から第 5 節まででウィギンズの問題意識と理論的立場に関する説明がおこなわれている。第 6 節と第 7 節では、従来のヒューム的主観主義の限界が示され、ウィギンズが提唱する感受的主観主義の理論への導入がなされている。感受的主観主義の理論が詳しく述べられているのは、第 8 節と第 9 節である。それ以降の節では、感受的主観主義の理論に対して向けられると思われる批判に答えながら、理論が補強されている。ウィギンズはこの論文において、主観主義を保ちつつ過度の相対主義に陥らない理論を模索し、対象の属性に対して一定の反応をもたらす主体の感受性を軸とする感受的主観主義を提案している。なお本稿では、この論文でのウィギンズの議論を大きく四つに分けて紹介する。

---

[1] “A Sensible Subjectivism?”は、*Needs, Values, Truth: Essays in the Philosophy of Value* (Oxford: Blackwell, 1987, 1991, 1998)に収められている論文である。要約にあたって参照したテキストは、上記著書の第二版(1991)から MDP に再録されたものである。

また、本稿では、"sensible subjectivism"を「感受的主観主義」と訳している。しかし、ヒュームを高く評価するウィギンズは、ヒューム哲学の重要問題のひとつである"sensible knave"という言葉をも念頭に置いていたと想像される。メタ倫理学における"knave"とみなされがちな"subjectivism"が賢明な(sensible)形をとると感受的(sensible)主観主義になる、という一種のシャレがここに隠されているのではないかと紹介者は邪推している。最初にタイトルを目にした読者は「賢明な主観主義って何？」と読む。論文の中身を読み終わった後に読者は「そうか、感受的主観主義か！」と納得する。このような仕掛けが"sensible"という言葉に込められていると思われる。

1．主観主義の問題点と可能性(第1節～第5節)

通常、メタ倫理学上の主観主義は、「x はよい」とは、それを語る S が x を是認している(あるいは、x が S に対して是認の感情を引き起こす)ことである、という見解として理解されている。しかし、この種の主観主義では評価の不一致(disagreement in valuation)をうまく扱うことができない。たとえばスティーヴンソンは、情動主義の見地から、評価の不一致を「表明された態度の不一致(disagreement in attitude expressed)」とみなしてこの批判に応えているが、十分説得力があるとは言いがたい。そこでウィギンズは、情動主義とは別の路線で主観主義を擁護する道を探っていく。ウィギンズが依拠するのはヒュームの主観主義である。

ウィギンズによれば、ヒュームの価値論からは、「x はよい」という文は「x は特定の是認の感情を生じさせる種類のものである」ということを意味している、という意味論的説明を引き出すことができる。ウィギンズはヒュームの公式見解をさらに改訂して、「x がよいのは、x が特定の是認の感情を適切にするようなものである時かつその時に限ってである(x is good if and only if x is such as to make a certain sentiment of approbation *appropriate*.)」という見解を立てる。この改訂は「よさ」と「適切さ」との循環に陥らせるように思われるが、ウィギンズはこれを「良性の循環」と捉える。なぜなら、ウィギンズの考えでは、主観主義者たちはこの種の循環を追うことによって、価値の概念が実際に感情と抜き差しならぬ関係にあることを示し、それを通じて価値の概念を解明しようとしているのであって、価値語を非価値語によって定義しようとしているのではないからである。

,

2. ヒューム的主観主義(第6節～第7節)

ウィギンズは、「x がよいのは、x が特定の是認の感情を適切にするようなものである時かつその時に限ってである」という主観主義の見解を展開するために二つの方法を吟味する。第一の方法は、ヒュームにならって、価値判断の正しさの基準を健全な判断者(sound/good judge)に求める路線である。健全な判断者とは、きわめて冷静で、きわめて少ない偏見しかもたず、事実に関する十分な情報に基づいて判断する者である。この路線で考えると、価値判断の相違や議論は、健全な判断者の判断に近づく試みとして理解される。本稿ではこの路線を仮に「ヒューム的主観主義」と呼ぶことにする。

ウィギンズによれば、ヒューム的主観主義の弱点は、味覚などの感覚と価値判断のアナロジーに依拠しなければならないにもかかわらずそのアナロジーの成立が疑わしい、という点にある。たとえば味覚の場合には、風邪をひいて味がしなくなった場合のような感官の欠陥ある状態とそうでない健全な状態との区別が容易だが、審美判断や道徳判断の場合には、健全な判断者や批評者を構成する要件はそれほど明確ではない。また、判断者の状態を「事実」や「実在」とみなすことによって、主観主義者にとっての正しさの基準を確保しようとするのでは、非主観的な基盤に基づくこととなり、主観主義はいびつなものになってしまう。以上より、ヒューム的主観主義という第一の方法はあまり有望だとは思われない。

3. 感受的主観主義(第8節～第9節)

そこでウィギンズは、「判断の健全/欠陥の区別」と同時に「判断主体の優位」を維持させたいというヒュームの理論的欲求を感覚と判断のアナロジーに訴えずに満たすべく、ヒュームの公式見解には見いだせない「ヒューム的示唆」を明示

化する。それは、「対象の中には、特定の感じを生みだすようもとから適合している特定の性質が存在する」という見解である。ウィギンズは、価値判断の正しさの基準を適切な判断者への参照のみによって説明しようとするヒュームの野心を棄て、「判断者の健全さの規準は、判断者が物事を正しく捉える傾向にあることである(the criterion for a good judge is that he is apt to get things right)」という普通の考え方を再生させる路線をとる。これが第二の方法であり、「感受的主観主義」とウィギンズが呼ぶ路線である。

ウィギンズによれば、価値や評価が問題となる時には、対象の属性と独立に主体の反応を考えるわけにもいかないし、逆に主体の反応と独立に対象の属性を考えるわけにもいかない。ただし、問題となる対象の属性が主体の反応に言及することによって説明されるという点で、ウィギンズの立場は「主観主義」と呼ばれうるのである。たとえば、「x はおもしろい」と言われる時には、対象 x の「おもしろさ」という属性が問題とされているが、その属性は主体に「笑い」などの反応を引き起こす限りで認められるものであり、そこでは常に属性と反応がペアとなっている。ウィギンズはこれを＜属性、反応＞ペア(たとえば、＜おもしろさ、笑い＞ペア)と表記している。＜属性、反応＞ペアは、知覚と反応の相互作用によって発展したり確立されたり停滞したりする。

ウィギンズはさらに以下の 3 つの想定によって感受的主観主義の射程を広げている。(想定 1)＜属性、反応＞ペアが確立されてしまってからでも、反応は、属性の出現に必要とされるものが出現しているか否かという問いに照らして矯正されうるものであり、様々な補助的考慮によって、特定の事物に対する反応について説明、批判、立証することができる。(想定 2)それゆえ、古典的主観主義のように、何らかの単純な反応が偶然でなく生ずればそれだけで属性の存在を認めるに十分である、ということにはならない。(想定 3)対象に目を向け、それが引き起こす反応について議論をするかわりに、まず反応に注目し、それにぴったり合

う属性の特色について議論することができる。こうした想定によって、価値判断に関する本質的論争可能性(*essential contestability*)が、価値述語の一義性をひどく損ねることなく確保される、とウィギンズは考える。

4. 感受的主観主義への批判の検討(第10節～第18節)

自らの感受的主観主義を説明した後、ウィギンズは、想定される批判に答えながら、理論の補完をおこなっている。本稿では、(1)相対性、(2)反応と属性の関係という 2 つの論点について簡単に紹介しておく。

相対性

感受的主観主義の立場からすれば、何がφであるかは、以下のような意味で相対的である。あるものがφであるということは、それが何らかの適切な反応をもたらすことに存する。この反応を A と呼ぶ。この時点ではまだ相対性は入り込んでいない。しかし、A がわれわれの反応(あるものが本当にφである場合にわれわれがそれに対してとる反応)である、という段になって相対性が入り込む。この相対性は、「対象 x に対して A という反応をするのは他ならぬわれわれであり、＜φ、A＞ペアの連結を共有しない人が A という反応をできないとしても、われわれは A という反応をする」という事実に存している。ウィギンズは、この相対性をポジティヴに受け止め、＜φ、A＞ペアを共有しない人がφをもつ x に対して A という反応をすると強弁する必要はない、と考える。われわれが価値語を獲得するプロセスは歴史的かつ特殊的なものであり、あらゆる場所でその内容が同じである必要はない。必要なことは、見解を異にする人々が、相違点の性質と程度だけでなく、相違点がどのようにして形成されてきたのかについても理解することである。

反応と属性の関係

単なる反応の収斂(一致)を根拠にして、本当にφであるものとそうでないものとを区別できるのか、という批判に対して、ウィギンズは、本当にφか否かの区別において重要視されているのは、何がφであり何がφでないかに関する意見(opinions)の一致ではなく、φな事物に対してあれこれ反応する感受性(*susceptibility*)の一致である、と応じる。ウィギンズによれば、x が本当にφであるのは、それが、φに対する感受性をもった人々の間で反応 A を生じさせそれを適切にするようなものである限りにおいてである。これは、「x がφであること」に関する合意が「実際に x がφであること」を構成する、というのとはまったく異なる議論なのだ、とウィギンズは釘をさす。

5. コメント

最後に、ウィギンズの感受的主観主義について、いくつかコメントしておきたい。まずウィギンズの議論は、ヒューム的主観主義が持ち込んでいる色や味の感覚と価値判断とのアナロジーの限界を指摘した上で成立しており、また、多くの道徳的判断がもつ「本質的に論争的な」性格を確保する試みもなされている点で、ブラックバーンによる道徳の知覚説に対する批判[2]の一部をかわしているとも考えられる。さらに、ウィギンズ自身が指摘するように、感受的主観主義をとれば、価値的な属性と自然的な属性との間にスーパーヴィニエンスの関係をみる必要もない。

また、実際に生じてくる評価の不一致という難問についてウィギンズは、主観主義のみが直面する困難ではないと断った上で、不一致の場に面しては、不一致の原因をケースバイケースで解明しつつ、討論に参加する人々のお互いの感受性

[2] 児玉聡が紹介しているブラックバーン「錯誤と価値の現象」(第三節)を参照せよ。

を排除しないように配慮するしかない、と述べている。こうした、メタ倫理学で問題となっているレベルと実践的な合意形成のレベルとの相違を明確に意識しながら議論を進めている点は、ウィギンズの長所でもあろう。

あえて難点を挙げるとするなら、感受的主観主義を成立させるために必要とされた、ヒュームの公式見解にはない「ヒューム的示唆」は本当に「ヒューム的」であるのか、という点である。ウィギンズの見解は、ヒュームというよりむしろハチスンに近いように思われるが、ハチスンに対してまったく言及されていないのは不思議である。

(おくだ たろう　南山大学)